

カミーロ・カステロ・ブランコ著『リスボンの謎』(2)

— 第一之書、第2章から第5章まで —

尾 河 直 哉

Tradução japonesa de *Mistérios de Lisboa* de Camilo Castelo Branco (2)

NAOYA OGAWA

キーワード

リスボンの謎 (Mistérios de Lisboa)、19世紀ポルトガル文学 (literatura portuguesa do XIX século) ロマン主義 (romantismo)、カミーロ・カステロ・ブランコ (Camilo Castelo Branco) ラウール・ルイス (Raul Luiz)、ミステリーリスボンの運命 (Mysteries of Lisbon)

第二章

その日からわたしは空を飛ぶ燕に興味がなくなった。視線は空から降り、地上の事物へと注がれるようになった。虚栄心からわたしは物質主義者になり始めた。人を鳥で譬えるなんて、下劣で卑しい

行為に思えた。

この細い手足が高貴な出自の証だと教えられる以前、自分は靴屋か名もない兵士か水売りの子だと想像していたが、あの日を境にそんな想像は二度としなくなった。あのイザベリーニャはわたしの想像力を金色に染め上げ、精神を高め、わたしを虚栄心で膨れ上がらせたのである。クラスメートに隠しておけないほどになっていた。わたしの「平凡」で「くすんだ」名前をからかおうとクラスメートがやってきたときは最悪だった。自分の名前が卑しいことを嘆き、ついには、「ジョアン」という名が御者と腕白小僧につく下品な名前であることを納得したあの日、やつらはわたしを侮辱しにやってきた。

いちばん厚かましく、いちばん英雄的な長い姓をもったやつが、芝居がかった身振りで胸の上に腕を交差させ、わたしのまえに立ち

はだかると、からかうようにこう言った。

「ジョアン！ ジョアン！ ジョアン！ 三たびジョアン！ 汝不幸なる者、なにゆえあだ名変えざらんや？ 学友ども、その懐にジョアンと呼ばれし朋輩ある不運を嘆きたり！ 汝、得べくんばその恥辱を拭いたまえ！」

わたしはまず軽蔑でこの演説者の顔を紅潮させ、次いで才気と辛らつさでこう応じた。

「同じくらしい年齢のやつがやってきてはくの名前をばかにするなら驚きません。でも、あなたは二十二でしょ。腹が立つより情けない！ なぜ時間をもっと有効に使わないんです。単語の意味を調べるとか、宿敵ウエルギリウスと仲良くなるとか。お忘れですか？ 去年、あなたはラテン語のクラスを落としているんですよ。クラスメートから笑いを取ろうと、ぼくをダシにした演説づくりについてを抜かしているようじゃ、来年もまた落第ですね」

この返事を耳にして、すでに成人に達していた相手は怒りを募らせた。わたしをからかおうとやってきたそのクラスメートから笑われたのだからよけいである。射るような瞋恚の眼差しでつかつかやってくると、容赦なくわたしの耳を引っ張った。耳は痛かったが、それに劣らず刺すような恥辱の痛みを心に感じた。

そのとき生まれてはじめて相手に復讐したいという欲望をおぼえた。鋭い針で覆われたサボテンの小さな鉢がすぐ近くにあって、それを相手の顔に投げつけた。さぞかし痛かっただろう。でかいなりをしてそれまでふざけていた相手は、顔を両手で覆うと、わたしにたいして指一本動かさなくなった。

クラスメートたちはおし黙ったまま茫然としていた。わたしは子どもじみた自尊心から、本物の貴族のように悠然とやつらのあいだを通り抜けると、『イーリアス』の第一章をまとめるため部屋へ戻った。

事が知れるまでにさして時間はかからなかった。とつぜん部屋の

中へ怒りに取り乱したドナ・アントーニアが入ってきた。

そのぎんぎんまくしたてるようすからすると、神父が帰ってきたらすぐにぞつとするような正義の鞭が振り下ろされるにちがいない。

高貴な誇りにしばらくは昂然と頭をもたげていたが、その緊張感が退くと、急に師が怖くなり始めた。部屋の近くに足音が聞こえるたびに心臓が飛び出しそうになる。待ち受けている懲罰を少しでも和らげられるものならどんなことでもするつもりだった。腕をへし折られるかもしれない。首枷を嵌められるんじゃないか。一週間バトンと水だけにされたら。神父が一生ほくに憎しみを抱くようになったらどうしよう。そんな拷問をあれこれ想像して、どんなことをされても福音書に従うように甘んじて受け入れようと心に決めても、恐怖心はいっこうに鎮まらなかった。

ついに熱まで出た！ 恐怖心がわたしの骨を砕き、肉を痛めつけた。あの病、あれはなんとも名状しがたいものだった！ かろうじて記憶に残っているのは、弩砲でも浴びたように、気を失ってへなへなとベッドに倒れ込んだことだけである。

ベッドに倒れ込んでから眼を開けるまでどれくらい時間が経っただろうか。気がついてみると神父とその令妹、そしてかかりつけの医者がいた。

夢を見ているのかと思った。

医者はわたしの手を取ると脈を確かめた。神父は優しそうな面持ちでわたしを眺め、ドナ・アントーニアは不安げにじつと医者を見つめている。

「さて、ジョアン。なにがあった？」 先生は親しげな口調で訊いてきた。

「よくわかりません。先生」わたしは適当な嘘を言った。

「殴られたのか？」と先生が訊く。

本当のことを言うべきどうかわからず、わたしはおし黙ってし

まった。

「殴られたのか？ ジョアン」。声を低め、厳しい調子で先生は繰り返した。

「いやたいしたことありません」。熱がぶり返しては困ると思ひ、そう答えた。

わたしの脈を取っていた医者も、神父が質問をするたび脈に異常が現れることに気づいた。

そこで医者は静かにするよう身振りで伝えると、神父はすぐに聞き入れた。

ふたりが立ち去ると、わたしはドナ・アントーニアと残された。この哀れなシスターの御心はまるで天使のようで、日用の糧に困っている人ばかりでなく、心に慰めを必要としている人にも同じように尽くす慈悲深い心の持ち主だった。わたしにたいしてはほいとも

良く接してくれた。神父からパンだけしか与えてもらえなかったときも、砂漠の行者に飛んでくる鳩のように肉をもつて来てくれた。

ただ、わたしが母親や父親のことを話題にするのはいやがった。主はその子たちをけつしてお見捨てにならず、世にいう捨て子は自らの子になさる。それが主の御心だ。そう言うのである。

部屋に一緒にいる短い時間、ドナ・アントーニアは、頭の病気の守護聖人である洗礼者聖ヨハネの画のまえに跪きずつと祈ってくれた。ときどき頭は痛くないかと訊いてくれたが、それはただの痛みではなかった。さながらふつふつと滾る活火山で、噴火を起こす地底のマグマが眼の中でのたくっているようだった。

ドナ・アントーニアがまだ祈りをあげているときに神父と医者が入ってきた。

神父は悲しそうな面持ちでやってくると、常ならぬ優しい眼でわたしをじっと見つめていたが、なにか湿布のようなものを持ってきた

医者は、それでわたしの足を覆った。ふたりはわたしの眼のどんな小さな動きにも注意して見ているようだったが、医者がずっとわ

たしの耳を観察していることに気づいた。ずいぶん後になってから、耳の揺れが脳の炎症の徴候であること

を知ったが、そのときまでわたしは、医者が喧嘩で負った耳の傷を調べているものだと思ひ込んでいた。

ただ、こんな想像をする暇もさほどなかった。深い眠りに落ち込んでしまったからである。

医者の見立てによれば、わたしの罹った病気は脳の鬱血だった。科学的に見ればこれは恐怖が原因で起こる病気である。数日間

は記憶がいつさいなかった。きつと譫妄状態で、しかもこの病気の特徴である痙攣があったせいだろう。

この人生の幕間は、おそらく瀕死状態の無感覚と混じりあっていたために記憶がないのだが、その幕間も終わったころ、ベッドの足許にひとりのご婦人がいた記憶がある。

部屋に明かりが灯っていたからあれは夜だった。そこにいたのはそのご婦人だけ。熱のために在らぬ人を見ているのだらうと思っ

た。ずいぶん長いあいだ、その顔が本物の顔だとは思えなかった。そう思えぬままに、じつと婦人の眼を見据えた。今でもその切れ長の黒い眼がありありとよみがえってくる。

婦人は背が高く、若くも美人にも見えなかった。黒っぽいマントをまとい、黒いスカーフを頭に巻いて、女中のように無造作に結んでいる。スカーフの下からは、三つ編みをほどこいたうねるような髪が見えた。その女性がどんなだったか、これ以上正確に言うことはできない。

交わした言葉は少なかったが、思い出してみると、だいたいこんな会話だったのではないかと思う。

「ジョアンくん、気分はどう？」

「頭が痛いです。それに眼も。体中が痛いです。どちらさまで

すか？」

「あなたのお友…先生の妹さんのお友だちよ」

「お名前は？ この家でお目にかかったこと、ないですよね！」

「リスボンにいなかったから、長いあいだ」

「喉が渴いて…」少しでいいから水が欲しい。そう言いたかった。

「がまんしてね…あなたは熱があるから。でも水を飲んじやいけないのよ」

「少しでいいから水をください。でないと死にそうです」

「あげられないわ。水を飲んだら死んでしまうもの」

じつさい渴きのために死にそうだった。ベッドの足許に花瓶があったが、その花瓶のなかに水があることを思い出した。必死の思いだった。ベッドから飛び降りようとした。飛び降りたと思っただが、ただ床に落ちただけだった。

くだんのご婦人は叫び声をあげ、抱き起そうと両手を広げ、わたしを目掛けて慌てて突進してきたが抱き起すことができなかった。

ドアに走り寄ると焦ったようにドアを叩いた。ドアが開くと、ご婦人がマントで顔を隠そうとしているようすが見えた。入ってきた神父とシスターに顔を半ば隠すためだった。

先生の逞しい腕で抱き起され、ベッドの上に投げ出された。水を飲ませて欲しいと苦しい声で言うと、渴きをまぎらすものを与えられた。

それから神父とシスターは退室し、謎のご婦人だけが残った。神父とご婦人のあいだではほとんど言葉が交わされなかったことに気づいた。退室するとき、わずかにドナ・アントーニアがこう言っただけである。

「あと五分あります」

するとわたしの謎の付き添いは、やってきてベッドの枕元に腰かけた。

「あなたはずいぶんがまんができないのね。死んじやったらどうするの？」と母親のように優しく愛撫しながら言った。

「だれか殺してくれればいい…」

「どうして？」

「生きていることがなんのためなのかわからないんです。こんなに苦しいのに！」

「苦しいの？」

「すごく」

「いま体がつらいからじゃない？」

「ふつうのときだって同じです」

「なにか足りないからじゃない？ 食べるものとか着るものとか？」

「裸で歩いたことも、お腹が空いて死にそうになったこともないけど、そんなことじゃなく苦しくなりません」

「じゃあ、あなたが欲しいのはなんなの？」

「お父さん」

数分間沈黙があった。

「でもこの神父さんはあなたのお父さんになってくれているんじゃないの？」

「あの方はほくのお父さんじゃないと思う」

「もちろんそうね」

「もちろんそうって」とわたしは堪えきれずに叫んだ。「じゃあ、ほくのお父さんを知ってるんですか？」

「それはね、あなた、わたしも知らないの。でもあの善良な神父さまとドナ・アントーニアがあなたのお父さんとしても仲良しだってことは知ってるわ。ドナ・アントーニア、とってもお優しいんじゃない？」

「でもあの人はお母さんじゃないし…」

さっきと同じ沈黙があった。でも今度はご婦人が眼に涙を浮かべていることに気づいた。

ご婦人はわたしの手を取った。手に唇を押し当てる感覚、そしてぼつりと涙の落ちる感覚が伝わってきた。

わたしにしてみれば、これはとてつもない珍事だった。わたしの頭脳はこうした衝撃を受け止められるだけの強さがなかった。混乱し、眠気に襲われた。断末魔の苦しみに襲われるといつても救ってくれるのがこの眠気だった。

ドアを叩く音が聞こえた。また接吻と涙の感覚が伝わってきた。今度はいくども。それからそのご婦人は逃げるようにわたしの許から去って行った。それはまるで美しい夢のようだった。ご婦人のように、わたしの気も遠のいていった。気を失ったのである。

夜更けにドナ・アントーニアが汗でじつとりと濡れた髪の毛を眼から掻き上げてくれたのである。苦痛にさらされた息子の足許にいる母親なら、そうせざるを得ないから。

「それで、ご婦人は？」とわたしは訊いた。

「ご帰宅なさいましたよ」

「だれなの、あの方？」

「わたしのお友だちよ」

「ぼくの友だちでもあるんでしょ？」

「ええそうね……とっても仲良しになったみたいだから」

「なんていう名前？」

「マリア」

「マリアだけ？」

「良い名前じゃない？ 神さまのお母さまと同じじゃないかしら？」

「イエス・キリストの先駆者もバプテスマのジョアン（ヨハネ）で、イエスの愛弟子もジョアン（ヨハネ）なのに、それでもみんな、ぼくの名前がみつともないって言うんだ」

「そんなことないわ、あなた。ほっておきなさい。そしたらクラスメートも二度とあなたの名前のことと意地悪なんかしないから」

「それじゃああなたの方、ほんとうにマリアさんっていうの？」

ドナ・アントーニアのためらいが、その嘘にたいするある種の叱

責だったが、今でこそできるこんな分析も、当時のわたしにはとうてい無理だった。その女性の名前がもつ価値など夢のなかでさえ想像できなかったからである。

「また会えることができたらなあ！」ご婦人に深い郷愁を感じてそう言った。

「またきつと会えますよ。でもまずわたしたちの主である神にお祈りしなさい。健康になれるように」

このとき神父が部屋に入ってきてシスターに言った。「この子にしゃべらせたらだめだつて言われているだろう？」

三人とも深い沈黙の淵に沈んだ。

第三章

わたしの脳の鬱血はひとまずやまを越した。だが病気は長引き、依然として予断を許さなかった。

ディニス神父は神父なりに活躍してくれた。神父の配慮は大多数の人に濃やかな配慮をしてきていたことは認めねばならない。自らの善良な魂のために多くの犠牲を払っていたのである。

わたしはときどきドナ・マリアという偽名の女性について尋ねたが、ドナ・アントーニアの答えは相変わらず謎めいていた。

たいへんお忙しくて、そんなにしよちゅうお見えになれないと言うときもあれば、逆に、どうしているか知りたくてお出かけくださったんだけど、あなたが熱を出してお見舞いができなかったの、と言いつつお見舞いすることもあった。

ドナ・アントーニアはわたしにいつも誠実に接してくれていたが、ひとつつかいにくい問題があつて、そのために悪意のない嘘をつかなければならなかった。それはある秘密にかかわっていたが、当時のわたしは十五歳で、その十五年には今日の社交の十五日分しか

含まれていなかったから、秘密についてはあれこれ憶測するほかなかった。

三か月のあいだ病に苦しみ、その間、医者からは一再ならず死の宣告を受けたが、その病の床からもやっと起き上がった。医者の子見は、不幸なことに、神慮と張り合うことができなかった。わたしは死ぬべきときに生き残った。

しかし、周囲の小世界におけるわたしの地位は、以前とすっかり変わっていた。新しい習慣。新しい自由。新しい配慮。新しい部屋までも用意されていた。いったいどうしたのだろうか？ 子どなりの訊き方でドナ・アントーニアに尋ねてみたが、なにも答えてくれなかった。神父もまたなにも言わなかった。尋ねられる雰囲気さえなかった。

クラスメートたちもわたしの不幸な名前を忘れてしまったようだった。わたしの耳を引つ張ったあのクラスメートは、例の不吉な喧嘩のあと数日して学校を除籍になった。

それまでつらくて仕方がなかった読書に、喜びを味わえるようになり始めた。自ら進んで勉強に熱を入れる習慣も身についた。勉強にいわく言い難い喜びを感じることができるようになったのである。そして、人生が大いなる善だと信じさせてくれる何かがこの世には存在することに気づき始めた。

学問の喜びをわたしにもっと感じてもらいたいと思っていた神父の眼には、この変化がちゃんと映っていた。神父がわたしの喜びを自らのものとしていることがわかった。だが、わたしがこうして変化したその遠因を、神父はひと言も説明してはくれなかった。

部屋にもって勉強していたときだった。夜更けにドアを叩く音があった。ドアが開き、マントで顔を隠した女性がひとり入ってきた。入ってすぐにドアを閉めると、肩からマントが落ちた。わたしは激しく抱きすくめられ、その胸にぎゅっと押し付けられた。

熱を出した晩の女性だった。間違いない。そう思った。あの黒く

輝く眼はあの人のものだ。あの蒼白く瘦せた顔も。繊細な、それでいて活力に満ちた頑強な体つきも。その活力は、ある種の体組織において死体が発する電気に似ていた。他人と見紛うはずがない。

わたしを抱いたとき、あの人の流した涙は言葉の代わりだった。言葉は発されたかもしれないが、唇から漏れ出たときにはため息ばかりになっていった。ついに謎が明かされようとしている。わたしの心臓はまた早鐘のように打った。心のなかの暗雲が引き裂かれた。奇妙な身震い、靈感を受けたときの振盪、体の奥底から湧き上がる衝動を感じ、わたしは思わずその女性のまえに跪いた。こらえきれなかった。わたしは膝を屈し、崇拜の念が澎湃として湧き上がる恍惚のなかで、「わたしの…」という隻句を耳にした。そしてわたしが本能的にその女性の手に唇を押し付けたそのときだった。女性の唇からは完全な姿で言葉が発された。それは「わたしの子！」だった。このとき感じたことを説明してくれななどとおっしゃらないでほしい。今ここでそのときの沈黙の謎を言葉に移し替えることなど、とうていできないからだ。それは言葉の表現を抹殺し、感情を涙で置き換える恍惚感だった。ひとりの息子の眼のまえに母親が突然姿を現わし、それまで存在することすら知らなかった人の心臓の拍動を、自らの胸に感じているのである。その驚きたるや、神の御前で人が感じる聖なる驚愕もかくやと思われるほどであった。

わたしは口ごもりながらも「おかあさん」という言葉を言いたかった。しかし、気恥ずかしさからか、動揺のせい、か、歓喜のためか、気おくれを感じてけつきよくなにも言えなかった。

「なんにも言ってくれないのね、おかあさんに」。母は、まるで聞かれることを恐れるかのように小声で言った。そして、わたしを抱きしめている体勢がつかいので、立ち上がると椅子に座ってわたしを抱き寄せ、肩に顔を凭せかけた。顔は燃えるように熱かった。

「わたしに会ったこと覚えてる？」ほほえみながら涙を流し、そう言った。

「あつたことすべて覚えてます。言葉も顔だちもなにひとつ忘れられません」

「わたしを見たのは一度だけ?」

「一度だけです。でもずっとほくのそばにいてくれたことは知っています」

「今、心のなかでお母さんのことどう思ってる?」

「どう言ってもいいかわからないけど、でも思い出してみると病気のときもこんな夢を見ていたような気がする」

「ねえ、なつてくれるかしら:お友だちに?」

「お友だちって」

「おかあさんの、ね?」

わたしは母の性急な接吻にかなり混乱していたのだろう。母の顔が揺れ、動きもどこか震えていたような記憶がある。まるで精神錯乱の発作のようだった。母の全身に震えが走っているのを見て、わたしは怖くなった。というのも、母親がもうだめだと思っていた子にしがみついて、やっと「これはわたしの子よ!」と叫ぶことができたそのときまで、子どもの方は女性というものをまったく知らずにいたのだから。

「あなたの声が聴きたいの!」と母は情熱的にそう言った。「口を開いて。おかあさんでなんども呼んで:だつて、疑っているんじゃないかと思つて。わたしがおかあさんだつてこと。心に訊いてみればわかるはずよ。ねえ、言つて、おかあさんで!」

わたしは聞き取れない言葉でなにやらもぐもぐ言つた。気おくれにはどうしても勝てなかつた。恥ずかしくて顔が真っ赤になつていた。それまでの人生でたつたいちどだけ精神的な圧迫を感じたことがあるが、それによく似た捉えどころのない圧迫感だった。心のなかではこの女性を母だと認めているのに、唇がひきつたりためらつたりして、子どものころに母親の口から刻み込まれたことのないその言葉をどうしても口にできない。

わたしは母の膝頭あたりにじつと眼を凝らしていたし、沈黙がいつしゆ恨みを表しているようにも受け取れたので、まるで小さいときに息子を捨て、大人になつてからその子を見つけて「わたしはあなたから愛と慈しみと尊敬を受ける権利があるのよ。だつてこのわたしが産んだんだから」と言いに来た酷薄な母親を、息子が責めているようにみえた。

しかし、年齢からいつて、当時のわたしにそんなことを考え、そんな仕返しができるかとも思えないし、たとえそれができたとしても、子どもの叫び声の方が大きかつた。それは孤児の暗い心のなかでながいあいだせき止められていた叫び声だつた。

ところが母はわたしの沈黙を不平の嘆きと受け取つた。沈黙をなげやりな態度と取り、わたしの無垢さを手段にした神による非難、天罰をそこに見て取つたのである。

そして母は悲しみのあまり泣いた。苦しみに歪んだ顔には精神的な苦悩が表れていた。良心の呵責に抗い、さながら幼虫のようなわたしにおびえながらも真正面から向き合つてくれたあの女性が、苦悩のなかにあつていかに崇高であつたか、いまだに忘れることができない。

そのとき眼は、精神錯乱のあの不吉な煌めきのような輝きを発し、その顔は、身を焼く業火の焰に炙られているようだった。神経の痙攣に唇は震え、頭から流れ出た汗でじつとりと濡れてどうしようもなく乱れた髪を、耳の後ろに搔き上げた。

母が愛を表現しているときほど恨みのこもつた憎しみが表れている例を、わたしは知らない。

だが、あの興奮状態のさなかにあつて母に恐ろしさの色合いを与えていたのは、じつはこの痙攣ではなかつた。

母の唇が震え滾るような接吻をわたしに与えているあいだも、憎悪という毒蛇が心の奥底でのたうちまわり、その恐ろしい毒を血管のなかにまき散らしていたのである。この憎しみはいつてみれば

瘡、失神、恐水病の発作であった。あの不幸な女性はそのため塗炭の苦しみを味わっていたのだ。

苦悩のなかでもひときわ変わったこの種のものを描けば、さぞ沈鬱な光景があらわれるにちがいない。しかし、この憎悪の来歴はまだ尋ねないでいただきたい。

それをここで語るのは早すぎる。涙というものは、ある種の人たちにとって日々生きることと同義であって、ひとつひとつ浮き彫りにでもないかぎり、その人たちの一生の記録など単調で盛り上がりがないものになってしまふからだ。

涙を語るにも、そのなりのやり方がある：

わたしは、いつしゆの悲痛な夢遊状態に陥った母を目覚めさせようとあれこれやってみた。しかし、わたしのおずおずとした努力くらいで発作はびくともしなかつた。急変をいくどか繰り返し、激しい引きつけを起こしてもがき苦しむ、痙攣を繰り返すうちに次第に衰弱して、やっかいなことについては筋肉が力を失った。

幸いなことに、母が座っていた椅子はベッドの近くにあった。気絶した母は、頭をベッドの上に凭せ掛けた。わたしは母の冷たい汗を拭いてやった。死んだのかと思った。そして、その残酷な疑惑が心のなかに忍び込むと同時に、わたしはドアに駆け寄って開くと、ドナ・アントーニアを呼び、両手を組んで、お願いだから母のために医者を呼んでほしいと懇願した。

哀れなシスターは、訪問客の恐ろしい状態を眼にして動転し、令児を呼びに走った。神父はいくぶん落ち着いていたが、それでも顔には驚愕がはつきりと読み取れた。失神した母の脈を取ると驚いて身を震わせたが、鏡を持って来させると、それを母の口の前に置いてじつとようすをうかがった。鏡が曇るのを確認すると、ほっとして叫んだ。

「生きてる！」

そのときドアを叩く音がして、外から声が聞こえてきた。

「もう十五分経ちました」

ちょうどそのとき母が目を覚まし、坐りなおすと、わたしたちをじつと見つめた。退室するようドナ・アントーニアに身振りや伝えずと、母の腕を支えていたドナ・アントーニアは外に出た。そしてドナ・アントーニアが退室しかけたころおい、神父はさきほど母の眼を覚ませた言葉を繰り返した。

「もう十五分経ちました」

「もう経ったの！」と母は叫んだ。

そして床に落ちていたマントを拾い上げると、わたしに別れの言葉も残さず、まるでここそ逃げ出すように部屋から姿を消した。それから急いで走り去る馬車の音が聞こえてきた。

第四章

出生の秘密はますます謎の色を濃くしていったが、それでも、わたしの属している階級だけはおそらく容易に察しがついた。

とはいえ、母は底知れぬ謎のままであった。あの狂乱、あの絶望、あの動揺がどうしても腑に落ちない。あとでひとりになって思い出してみると、あの短い逢瀬に見聞きしたことはどれも狂気の発作だとしか思えなかつたのである！

ドナ・アントーニアに子どもっぽい疑問をぶつけてみたが、疑念を払拭してはくれなかつた。いつもはやもやとしてはつきりせず、「母親」という言葉を口にするのを恐れているようだった。いくら頼み込んでも、すでに知っている以上のことは教えてくれなかつた。

神父もなにひとつ話してくれなかつた。以前よりもわたしの話に耳を傾けてはくれたが、冷たい表情と教師然とした謹厳さだけは相変わらずだった。

わたしはもの思いに耽ると気を取られて勉強に集中できなかつた。

ので、神父は考え事をさせたがらなかった。授業回数を増やし、科学的な思考をさせることで、謎めいた人生に思い馳せる無駄な時間をつくらせまいとした。

それから数か月が過ぎたが、母には会えなかったし、だれも母の話をしてくれなかった。

その女性に悲痛なまでの郷愁をおぼえるようになった。心のうちにはいつもその姿が映し出され、夢のなかではあの言葉が鳴り響き、顔には接吻の熱さと涙の奇妙な感触が残っていた。

こうした思いはやがて深い愛着に変わった。あのひとの息子なんだという実感が生まれた。未来を言い当てる魂の声がそう教えてくれたのだ。この声は心もつ能力のひとつだが、その能力が発揮できるように外的な感覚も備えていたから、深いところで確信がもてたのである。

もしわたしがあのひとの息子でなかったなら、この思いは愛する女に抱く烈しい熱情に変わっていたにちがいない。「おかあさん」と呼べないなら、「妻よ」と呼んでいただろう。当時わたしは、このふたつの感情が愛の最も避けがたい条件を満たしていることを知らなかった。しかし、二十年の経験が教えるところを知った今と同じように、あのころも思っていたのである。

ある日、神父がやってきて、一緒に外に出るから着替えなさいと言った。驚いた。その日は授業があったし、日曜日にそんな心遣いがわたしにたいしてなされたことなど絶えてなかったからである。わたしたちは出発した。道のりは長かった。町を通り過ぎるあいだ神父はほとんど口をきかなかった。人気のあまりない通りで標識に眼をとめた。カンポリッドとあった。それからわたしはさらにその先長い道のりを進んだ。田舎の小道を抜け、農場を囲む土塀に沿って進むうち、いつしかリスボン^{リスボン}は視界から消えていた。そしてその土塀が切れるところに、樺^{びん}と柳と糸杉の茂みに隠れるようにして暗くうら悲しい大きなお屋敷があった。

そのお屋敷に向って、石のベンチを囲むように見晴台が曲線を描いていた。神父はベンチに座ると、わたしにも坐るよう言った。

「どうだ、ジョアン。この場所、気に入ったか？」と神父が訊いた。

「とっても気に入りました。こんなところで暮らせるといいなあ」

「なぜだ？」

「いや、なんだかとっても悲しいから……」

神父は微笑んだ。

窓はひとつをのぞいてすべて閉まっていた。なんだか住人がいないようだった。閉まっていないその窓も、半分しか開いていない。

神父がその窓をじつと見ていることに気づいた。好奇心から神父の視線をいくども追った。

そうして一時間以上も経っただろうか、窓ガラス越しに人の顔が見えた。神父は現れた人物に軽く会釈をし、帽子を取って立つようにわたしに言った。

窓の人物が合図を送ったのが見えた。神父はわたしに坐って帽子をかぶるように言った。

顔を隠しているマントがしわになって落ちた。それは母だった。驚きの動揺が収まるまもなく、わたしは堪えきれずに言った。

「おかあさんだ！」先生は静かにと言った。

わたしは母の顔から眼が離せなかった。母は眼で合図を送って微笑み、眼元をぬぐってから、神父に身振りで合図のようなものを送った。神父は、わかったと身振りで応えた。

見ていると、母は不意の来訪から身を守ろうとでもするかのようになるときどき姿を消した。以前よりもいっそう骨と皮だけになっていた。苦しみて肉が蝕まれたように、眼の周りに隈ができていた。

母のところに行かせてほしいと神父に頼んでみた。神父は微笑みながらわたしの依頼を身振りで伝え、母の微笑む顔も見えたが、不幸の反語的な表現であるその微笑みには、どれほどの恐ろしい苦痛

が隠されていたことか！

数分が経った。母は姿を消すと、また慌てて戻ってきてわたしにさようならを言った。

先生は帽子を脱いで頭の汗を拭うふりを見ると、そっちの方を見ちゃだめだと言った。

だが、わたしはがまんがでできなかった。母が用心深く閉めておいた窓ガラスが突然大きな音を立てて開いた。

なかば強引に眼を向けると、男のぞつとするような姿が見えた。怒りに眼をむいてこちらをねめつけている。神父もしばらくは相手を見返していたが、そのままの姿勢を保ったまま、まったく動じていないふりをした。わたしに男を見るなども言わなかった。自然にしていれば自分たちにはたいする疑いも少しは晴れると考えたのかも知れない。

しかし、神父にたいする男の注意は倍加したようだった。男の視線にはどこかしら恐怖心を煽り立てるようなところがあった。眉間にしわを寄せ激高した声でこう言ったときには、一刻も早くその場から立ち去りたくてたまらなかつた。

「なにか用事でもあるのか？」

「いやございませぬ」と神父は言った。「しばらく休もうと思いましたが、お邪魔なようでしたら辞去いたします」

先生は立ち上がると、男は奥に引つ込み、窓を閉めた。わたしは来た道を通って帰った。

その晩、わたしと神父のあいだにはこんな会話が交わされた。

「きみの出生についてはどうぶんあまり話せそうにない？」

「でも…ほんの少しでも…」

「あの女性が母親だということは知っているだろうね…」

「はい。でもあの方はいったいどなたなんですか？」

「それは知る必要もなければ尋ねてもいけない。きみを産んで教育をつけさせてくれた方だ」

「父は、あの窓に姿を見せた男ですか？」

「いや違う。きみの父親はもうこの世にいない」

「それじゃあ、あの男は親戚かなにか？」

「いや、親戚ではない。きみの母親と結婚した男だ」

「母の夫ですか？…それじゃあ彼の敵ですね。そうでしょうか？」

「なぜそんなことを訊くんだ？」

「だって男はぼくが存在することを知らないんですよ」

「いや知っている…でもまあ…その件についてはこれ以上訊かないでくれ。答えられないから。だが、わたしときみが望んでいるよりも早く、すべては明らかにになるかもしれない」

会話は、部屋に入ってきたドナ・アントーニアによって中断された。妹は兄に一通の手紙を持ってきた。

神父はそれを読むと思案に暮れた。正反対の気持ちに引き裂かれているようだった。そして退室するときになつてからやつとわたしにこう言った。

「きみにはおかあさんの苦しみに満ちた人生をあらまし知っていてもらいたい。それがここに書いてある。おかあさんの自身の手でね…この手紙を読みなさい。そしてこれを書いた人が憐れみを受けられるよう神に祈りなさい」

鉛筆書きの手紙はこう語っていた。

「伯爵は疑っています。眼が合ったとき貴殿が狼狽したと話ししております。あのふたりはいったいどなたのかと根掘り葉掘り秘密を聞き出そうとしました。ヒ首を胸につきつけて問い詰めるんです。眼が血走っていました。殺されるかと思いましたが、わたしはいつものように自らを犠牲に差し出し、跪いて殺してちょうだいと言いました。わたしがこの従順な姿勢をとると、あの人はわたしの顔を唾を吐いたわ。怒り狂ってあなたを捜しに出ました。さいわい遅すぎて追いつかなかつたよう

す。下男にあなたの搜索のことでもなにか命令を出してしました
が、いずれ空振りに終わるでしょう。もう二度とあの子と外出
なさらないでください。わたしが迂闊でした。この先さらに八
年、光が奪われることになりそうです！ 主よ、お願いです。
わたしを天にお召しください！ あの冷血漢を殺したいので
す。あきらめて死ぬるようにお助けください。貴殿の、あるい
はあの子の文章がせて二行あれば、それだけで安らかに死ん
でゆけます。それだけでわたしの長い受難は報われ、栄冠を頂
くことができます。さようなら。息子を抱きしめてくださいま
すね？ さようなら。

— A. —

苦しみはわたしの精神を不幸な人々の最後のよりどころにまで高
めたようだ！ わたしは跪き、手を組むと、母を憐れんでくださ
いと神に祈った。

第五章

母の手紙を読んでから、わたしの魂は悲しみのヴェールに覆われ
た。自分の不幸の原因を母親の胎内にまで遡って探そうとする気
は、ヨブのようにもうなくなっていた。本当の不幸は、わたしを息
子と呼ぶ女性の存在を知ったときに始まったのだ。その女性の不運
に神父は涙せずにいられたが、手紙を読んだあとでは、わた
しもその涙がまったく無理からぬものと思えた。

毎朝、挨拶を口実に母のことを神父に尋ねた。しかし、三か月の
あいだ、吉報も凶報もいっさい耳にできなかった。神父はもうあの
不幸な女性と密かな情報交換をしていなかったのである。これしき
のことで驚いてはいけなさと、神父は答えて言った。この八年間で
これが初めての音信不通ではなかったのである。

母の手紙に、光の奪われた八年間について書かれていたことを思
い出した。こんな責め苦がありうるなんて、わたしには信じがた
かった。そこでこの野蛮な懲罰の理由を神父に問い詰めた。だがど
んなに問い詰めても、神父は、母の命令を破ってその人生について
話すわけにはゆかないと答えるばかりだった。

ドナ・アントーニアはわたしと同じくらいしか事情に通じていな
いふりをした。秘密は神父だけが知っていた。神父は七つの封印が
施された一冊の書物であった。その封印を解くことができるのは屍
の手だけで、しかも、その屍は、神父の言葉を借りれば、薫り高い
バルザム軟膏を塗らねばならないわたしの傷に、毒を塗って治療す
るといふのだ。わたしという孤児の涙をぬぐうためにやってきたあ
の天使はいったいなんだったのか？ 謎に満ちた責め苦を知りなが
ら、母親を助けることもできず、よりよい未来への希望でその痛み
を和らげてあげることができない息子の苦い涙と入れ替わっただけ
ではないか！

わたしは、年齢に不相応な苦しみに満ちた物思いを、人生のきわ
めて早い時期から始めることになった。無邪気な欲望のみなきるあ
の時代に、子どもらしい活気も知らなければ、幸せをあれこれと思
い描いてみることもなかった。現実にはわたしのなかで、わたしと
もに始まった。というのも、花が咲き誇っているべき場所で茨を踏
むとき、苦悩には詩情もなければ、天にまで昇るような恍惚感もな
いのだから。

それでも、母と苦しみを分かち合おうとする献身を諦めることは
できなかった。悲しみは痼疾にまでなり、そのために人生のエネ
ルギーが失われてゆくのを感じ、母を救う手だてを待ちながら息
切れし始めていた。感じている本人は同情などしてもらいたくない
のに、他人に敬意を引き起こしてしまう静かな苦痛というものがあ
る。わたしの苦痛がそれだった。

三か月後、母が生きていることがわかった。だがその生がいかな

るものか、ささやかな文面から知ることになった。わたしにまだ読めない言葉があるからと、神父はその短い手紙をわたしに読んで聞かせてくれた。こんな手紙だった。

「あの男は下男のベルナルドが怪しいと睨み、暇を出してしまいました。頼みの綱だったあの善良な下男を奪われてしまったのです。せっかく苦勞して味方につけたのに。貴殿に手紙を送る手だてはまだ見つかりません。この手紙も震えながら書いています。いつ伯爵の手にわたるともされませんか。あの残忍な男は、わたしを苦しめる邪悪な手口をあこれ考えだしています。わたしを死なせることに悪魔のような執着心を抱いているようです。でもまだ殺す決心はしていません！…臆病だからでしょうか？ わたしが苦しむ姿を見て愉しみたいのでしょうか？ あの子はどうしていますか？ わたしのこと、あの子にお話になっていらつしやいますか？ あの子のことは、わたしの想像力に深く深く刻みこまれています。胸を熱く焼くこの母の愛がもし感じられなかったら、恋の記憶だけで、ひとりの天使にたいする思慕の念だけで満足していたかもしれません！…ああ、神さま！…この世に降り立ったあの天使は涙を遣し、その涙は間もなくしてわたしたちの不幸な息子を遣しました！ デイニス神父。あの子の父親になってください。愛と宗教と隣れみと、神さまが神父さまにお与えになった善良な心の力で。」

神父は、最後まで書き終わっていないその手紙を朗読すると、いつになく真情を露わにしてわたしを抱きしめ、一緒に泣いてくれた。

翌日、ドナ・アントーニアがやってきた。お仕着せを着た下男がひとりきていてあなたに会いたがっているが、兄の許可なしに話させるわけにはいかないと言う。下男は、怪しい者ではない、ただ、臆病な奥さまがご令兄の敷いた規則を破ることができないでいる

ものだから、と言って退かなかった。神父はちようど留守にしていた、いつ帰るかわからなかった。

ドナ・アントーニアが他のことに気を取られているすきに、わたしはその下男のそばに駆け寄った。見たことのない男だった。相手もわたしを知らず、名前を訊かれた。男はわたしに、母親と称する女性に会いにきたことは間違いないかと尋ね、本人であることを確かめようとした。

そう訊かれて、わたしはどう答えたらいいか迷った。相手は、母にひどい仕打ちをしているあの男が放った追手かもしれないからだ。

自分から話そうとやってきたにもかかわらずためらっているわたしを見て、下男は、心配しないで本当のことを話してほしい、わたしはあなたがやってきた当時おかあさんの相談相手だったのだから、と言った。

そこでふと以前読んでもらった手紙のことを思い出し、母が失った下男の名前が記憶によみがえってきた。

「お名前は？」とわたしは尋ねた。

「ベルナルドです」

「ああ！ それならまちがいない。お友だちです！…」

嬉しさのあまり男の腕の中に飛び込むと、男は両腕を開いて迎え入れてくれた。そしてわたしをぎゅっと抱きしめると、すすり泣きながらなにかを口にした。それはまさに心の奥底から発された言葉だった。

「ああ、息子さんなんです！ わたくしの大事な奥さまの」と男は叫んだ。「あの聖女さまの息子さんなんです。奥さまは、苦しみに押し潰されてこの世を去ろうとしていらつしやいます」

「じゃあ、おかあさんの生活を知っているんですね？」激しい不安に駆られながらわたしは訊いた。「話して。知っていることをぜんぶ話して…ぼく、ずっと泣いていたんです…おかあさんがどんな

につらいめにあっているかも知っています。でもどうしてそんなつらいめにあっているのか、おかあさんも、神父さんも、アントーニアさんも教えてくれないんです」

「どうしてあんなつらいおもいをなさっているかって…」滂沱の涙に濡れた顔を拭うと言葉を継いだ。「それじゃあ、ぼっちゃん、あの哀れな伯爵夫人がなんでつらいおもいをなさっているのか、ご存知ないんですね？」

「伯爵夫人だって…」とわたしは大声をあげた。「それじゃあぼくの母は伯爵夫人なんですね！…ああ、そうだ…そうだった…その理由をぼくはもう聞いたことがあったんだ…」

神父に宛てて書かれた最初の手紙の出だしの部分を思い出した。そこには伯爵について書かれていたが、わたしは社会的なしきたりのどうでもよい細部については教えられていなかったのだ、あの伯爵の犠牲者であり妻であり奴隷である以上、母が伯爵夫人でしかありえないということにすぐには理解できなかったのである。

「邪悪さにおいてこの世に並ぶものなきあの男と結婚なさっている以上、あなたの母君がサンタ・バルバラ伯爵夫人であることは間違いないです。お坊ちゃま、あいつは虎のように残念な男です。考えうるかぎり最低のやつです。頭に血がのぼったときのあいつの眼なんかご覧になったらもう！」

「もう見ました。怖かった！」

「そうでしょう。あれこそまさに神が人類に罰を与えるために遣わした男ですよ。わたくしは二年間、あの男の下で苦しみました。もしわたくしがいなかったら母君は喉が渴いていくど死んでいたかわかりません…」

「喉が渴いて死ぬなんて！」本物の不幸というものがさらにまたひとまわり大きくなったような気がして、わたしは叫び声をあげた。「でもなぜですか？ 母がその男になにか悪いことでもしたんでしょうか？」

「なんにも…それどころか、あの方はいつだって跪くようにして伯爵の意を汲もうとなさっていました」

「それじゃああなたの理由もなく…」

「実を申しますと、お坊ちゃま、なにがあったのか、わたくしもお話することができないのです。なぜ母君が迫害なされているのか知る者が家にはおりませんでしたから。ただ察するにその主な原因はどうか、その…お坊ちゃまにあるようなんです」

「ぼくに！ ぼくがあの男になにか悪いことでもしたっていうんですか？」

「そういうことではございません。ただ、もしわたくしが原因を知っていたとしても、お話しはできないと思います。お坊ちゃまはまだお若くて理解できませんから。時が来ればすべてわかるはずですよ」

「でも、ベルナルド、教えてくれないか。ぼくのおとうさんに会ったことはあるんだろ？」

「いや、ございません」

「でも、だれだかは知っているんでしょ？」

「それも存じ上げません。訊いたことさえありません。わたくしのかかわるべき事柄ではございませんので」

「でもおとうさんは死んだって聞いたけど…」

「そうかもしれません。ただ、そのことは存じ上げませんでした。そうしたことをすべてご存知なのが神父さまです。お坊ちゃまがお生まれになったときから伯爵夫人を存知ですから」

「ぼくが生まれたときから？」

「もちろんです。お坊ちゃんはお生まれになってからおそらくずっとここにいらっしやいました。少なくともずっとここで先生としてお坊ちゃまの教育にあたっというらっしゃったのが神父さまです」

「でもぼくにおかあさんがいるってことを知ったのは、ついこの

あいだなんだよ」

「それも驚くにはあたりません。お坊ちゃまの母君は八年間も部屋に閉じ込められて、太陽も月もごらんになつていなかったんですから……」

「でもなぜ？」

「これはわたくしの想像にすぎませんが、伯爵夫人にお子さんがあることを伯爵が知ったからではないかと。はっきりしたことは申し上げられませんが、お坊ちゃまの母君が精神錯乱を起こしているあいだに、そんなことでも口走ったのか、まあ、そんなところではないかと……」

ちようどそのとき、残念なことに、神父が現れた。わたしに話したことを神父には言わないでくれとベルナルドに頼んだ。

神父はベルナルドを愛想よく遇した。わざわざ会いに来てくださり、お氣遣いありがとうと言った。わたしの方では、甘えて、できることなら毎日でも来てほしいとベルナルドにしつこく頼んだ。

〈第一之書第六章に続く〉